

本山町埋蔵文化財調査報告書第5集

# 堀ノ尻遺跡

(高知県長岡郡本山町)

高知県  
本山町教育委員会

1993

# **堀ノ尻遺跡**

**本山町埋蔵文化財調査報告書第5集**

**高知県  
本山町教育委員会**

## 序

本山町は、近年縄文時代後期の松ノ木遺跡が明らかとなり、この遺跡を標式とする松ノ木式土器が型式設定され、土器型式のみならずその文化的内容が全国から注目されつつあります。また吉野川流域の段丘面には縄文・弥生時代に属する数多くの遺跡が分布しており、本山町の歴史的景観を形成しています。これらの遺跡の一つ一つが、私達の祖先の営みを今日に伝える貴重な足跡であり、かけがえのない文化遺産であります。

今回の堀ノ尻遺跡の調査は狭隘な面積にもかかわらず、当地域では出土例のなかった緑釉陶器が出土し、本山町の古代史像を明らかにするうえで重要な手掛りを得ることができました。

本報告書が斯学の向上を埋蔵文化財の保護に生かされることを心より念じます。

平成5年3月

高知県長岡郡本山町教育委員会

教育長 和田 聖寛

## 例　　言

1. 本書は、本山町教育委員会が平成2・3年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 堀ノ尻遺跡は、高知県長岡郡本山町本山堀ノ尻に所在する。
3. 発掘調査は、1次調査が平成2年7月4日～7月6日、2次調査が平成3年3月28日～4月4日、4月17・19日に実施した。1次調査の面積は150m<sup>2</sup>、2次調査の面積は160m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査は、本山町教育委員会の依頼により高知県教育委員会が行った。  
調査員　出原恵三（高知県教育委員会文化振興課　主幹）  
事務担当　松葉孝史（本山町教育委員会）
5. 本書の執筆・編集は出原恵三が行った。
6. 遺物整理・図面作製等の作業においては、浜田雅代・矢野雅・宮地佐枝氏の協力を得た。

## 報告書要約

1. 遺跡名　堀ノ尻遺跡
2. 所在地　高知県長岡郡本山町本山堀ノ尻
3. 立地　吉野川右岸の中位段丘
4. 種類　弥生後期～平安時代の集落址
5. 調査主体　本山町教育委員会
6. 調査契機　町道拡幅
7. 調査期間　平成2年7月4日～7月6日、同3年3月28日～4月4日、同4月17日・19日
8. 調査面積　310m<sup>2</sup>
9. 検出遺構　ピット多数
10. 出土遺物　弥生土器、須恵器、綠釉陶器、土師器
11. 内容要約

詳細な遺構の時期・性格等については十分に明らかにすることができないが、出土遺物から見る限り8世紀末から9世紀にかけてピークを迎える。綠釉陶器の出土は当地域においては初出土であり注目される。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過.....	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の地理・歴史的環境.....	1
第Ⅲ章 本文.....	4
1 1次調査.....	4
2 2次調査.....	8
第Ⅳ章 まとめ.....	17

## Fig 目 次

Fig 1 : 堀ノ尻遺跡の位置と周辺の遺跡	3
Fig 2 : 堀ノ尻遺跡 1・2 次調査位置図	4
Fig 3 : 1 次調査検出遺構	5
Fig 4 : ↗ 出土遺物実測図	6
Fig 5 : ↗	7
Fig 6 : 1 次調査検出遺構及び南壁セクション	7
Fig 7 : 2 次調査 1 区 P2 実測図及び出土遺物実測図	8
Fig 8 : ↗ 2 区検出遺構実測図	9
Fig 9 : ↗ 2 区西壁セクション	10
Fig 10 : SK 1 ~ 5 実測図及び出土遺物実測図	11
Fig 11 : P 1 実測図	12
Fig 12 : P 2・5・7・15・16 実測図及び出土遺物実測図	13
Fig 13 : SX 1 平面図・セクション及び遺物出土状況	14
Fig 14 : SX 1 出土遺物実測図	15
Fig 15 : SX 2 実測図及び出土遺物実測図	16
Fig 16 : 包含層出土遺物実測図	16

## 写真図版目次

PL 1	2次調査2区発掘前の全景(南から)、同石垣基礎下の状況	25
PL 2	〃 完掘状況(北から)、同SX1南端部分遺物出土状況	26
PL 3	〃 SX1遺物出土状況	27
PL 4	〃 西壁・同完掘状況(北から)	28
PL 5	〃 P5完掘状況・同SX1遺物出土状況	29
PL 6	〃 遺構及び遺物出土状況	30
PL 7	出土遺物	31
PL 8	〃	32
PL 9	〃	33

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

### 1 一次調査

長岡郡本山町本山にある堀ノ尻遺跡は、町立プラチナ情報センター建設に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡である。当遺跡は平成2年度に実施した香美・長岡ブロック遺跡分布調査では登録のなかった遺跡であるが、当地が吉野川右岸に臨む中位段丘という良好な立地をしている（Fig 1）ところから、平成2年5月15日プラチナ情報センター建設予定地内で小規模な試掘調査を実施した。その結果、弥生土器、須恵器の細片が少量出土したが、出土状況は砂礫層中の二次堆積によるものであり、遺物包含層も形成されていないことが判明した。したがって同センター建設については慎重工事で臨むよう指示したのであった。

その後同センターの東隣を南北に走る町道柿ノ下線拡幅工事が実施され、土器出土との情報が本山町教育委員会を経由して高知県教育委員会にもたらされた。県教委は直に調査員を現地に派遣し状況の確認を行った。現地は拡幅工事の掘削がかなり進んでおり表土層下にある黒ボク層中より弥生土器・土師器などの細片が見え隠れしていた。プラチナ情報センター試掘地点の状況とは全く異なっており、遺物包含層が形成されている可能性があることから、直に工事を中止し緊急発掘調査を実施するよう町教委を指導した。町教委は町道工事の主管課である産業建設課と協議を行い、平成2年7月4日～7月6日の3日間、150m<sup>2</sup>について緊急発掘調査を実施した。（Fig 2）

### 2 二次調査

同町道の拡幅工事は、工事区域を南に延長して平成3年にも継続して実施されることとなり、町教委は同町産業建設課と協議を行い工事に先立って、平成3年3月28日～4月4日、4月17・19日に記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の地理・歴史的環境

堀ノ尻遺跡のある長岡郡本山町は、四国島のほぼ真中、高知県の最北部に位置し近隣の町村と共に嶺北地方と呼ばれている。町を南北に2分して流れる吉野川の中・上流域は、大歩危・小歩危の地名に表われたように峡谷で有名であるが、本山町付近では蛇行を繰り返し大小の河岸段丘を形成し、人々に生活と生産の場を提供している。吉野川は近世以降、四国山地で伐採した「御用材木」の搬出路として利用されたことからも窺えるように東からの文物流入の動脈としての機能を果して来たのである。また本山町は、瀬戸内と太平洋側を結ぶ中継地点でもあり、このような地理的な環境が同町の歴史・文化の形成に規定的な影響力をも

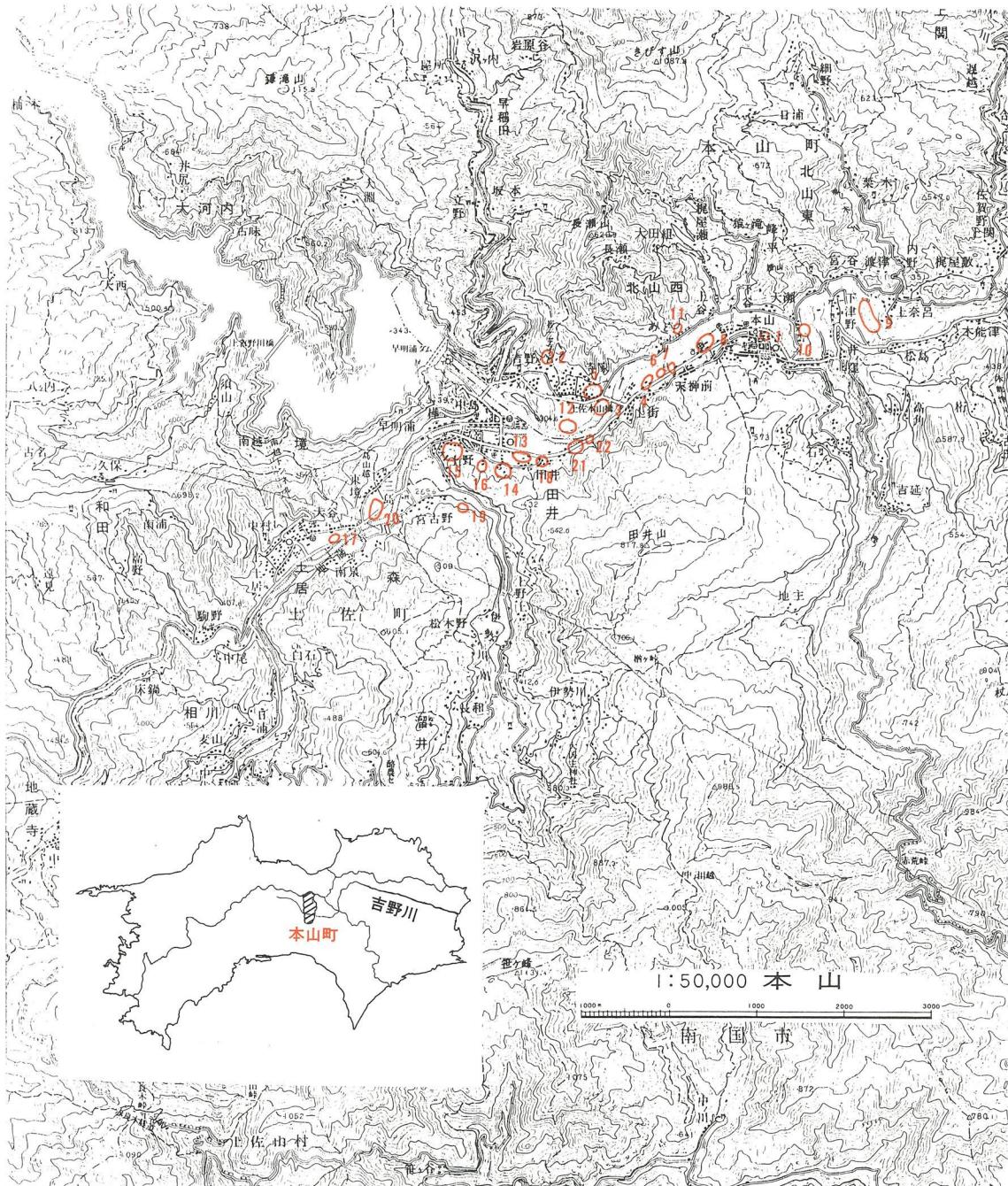
ったと考えられる。事実、本山町から土佐町にかけての流域には縄文時代から古代・中世にかけての遺跡が、数珠繋ぎに分布しており、四国島の山間部にあっては最も分布密度の高い地域を形成している。

堀ノ尻遺跡は、同町の中心部である本山町本山字堀ノ尻にあり、吉野川右岸の中位段丘上に立地し標高252m前後を測る。周辺における最古の遺跡は、長徳寺址（2）から出土した縄文早期の高山寺式土器を挙げることができる。<sup>(1)</sup> 続く前期・中期は松ノ木遺跡（12）、玉屋敷遺跡（15）で少量の遺物が確認されている。後期に至ると遺跡数が飛躍的に増加し河岸段丘上の随所に見られるようになる。中でも松ノ木遺跡は1～3次の発掘調査が実施され、南四国の成立期縁帶文土器である松ノ木式土器の標式遺跡として俄かに注目を集めている。<sup>(2)</sup> 晩期は前半の資料が八反坪遺跡（13）から<sup>(3)</sup>、後半の刻目突帶文土器が松ノ木遺跡から出土している。このように当地域は早期以来連綿として生活の跡を辿ることが可能で、縄文時代の遺跡の希薄な中・東部にあっては最も充実した内容を持つ地域として重要な位置を占めている。

弥生時代は、中期末から遺跡が分布し始め後期末～古墳時代初頭に至って爆発的な増加を見せる。嶺北高校校庭遺跡（8）<sup>(4)</sup>からは多量の土器が出土しており、銀杏の木遺跡（4）<sup>(5)</sup>からは堅穴住居址状遺構、貯蔵穴が検出され、松ノ木遺跡<sup>(6)</sup>からは3棟の堅穴住居址が確認されている。また当町及び隣接する土佐町からは銅鐸1個（突鈕4式）、銅矛5本（中広II-4、広型I-1）が確認されている。当地域は高知平野と共に銅鐸・銅矛の錯綜地域を形成している。古墳時代以降・奈良時代までは見るべき遺構はほとんど存在していないが、延暦16年（797）に至り吾橋・舟川の駅が設けられた記載があり（『日本後記』）、この2駅を本山町周辺に比定することも可能で、この時期から再び遺跡が分布するようになる。

#### （註）

- （1）岡本健児他『長徳寺址発掘調査報告書』高知県長岡郡本山町教育委員会 1977年
- （2）出原恵三・前田光雄『松ノ木遺跡』I 高知県長岡郡本山町教育委員会 1991年
- （3）岡本健児・宅間一之・森田尚宏・井本葉子「玉屋敷・八反坪遺跡の出土遺物」『土佐町資料』高知県土佐郡土佐町教育委員会 1981年
- （4）岡本健児「嶺北高校校庭出土の遺物群」前誌（1）
- （5）岡本健児『銀杏の木遺跡の発掘』高知県長岡郡本山町教育委員会 1984年
- （6）出原恵三『松ノ木遺跡』II 高知県長岡郡本山町教育委員会 1991年



1	堀ノ尻遺跡	弥生～中世	9	下津野遺跡	縄文・弥生・中世	17	沖田遺跡	縄文
2	長徳寺遺跡	縄文～中世	10	上奈路遺跡	縄文・中世	18	樋ノ口遺跡	縄文・弥生
3	東久保遺跡	弥生	11	北山瀬ノ上遺跡	中広銅矛出土	19	高笛遺跡	弥生
4	銀杏の木遺跡	弥生～中世	12	松ノ木遺跡	縄文～古墳	20	静岡遺跡	縄文
5	寺家遺跡	中世	13	八反坪遺跡	縄文	21	大畑遺跡(岡遺跡)	弥生
6	東畑遺跡	弥生・中世	14	下田遺跡	弥生	22	鳥井遺跡	縄文
7	天神前遺跡	弥生	15	玉屋敷遺跡	縄文			
8	嶺北高校遺跡(永田遺跡)	弥生～中世	16	田井古屋遺跡	弥生			

Fig 1 堀ノ尻遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第Ⅲ章 本文

### 1. 1次調査

幅6.4m、長さ24.6m、面積約150m<sup>2</sup>を測る南北に長い調査区である。先述のように当調査区は道路拡幅工事によって相当の削平を受けていたが、断面より地山の黄褐色シルト層の上に黒ボク層が整合で載っていることが確認できた。検出遺構は溝状遺構1条と小ピット2個、北隅の黒ボク層中より弥生時代終末の土器及び縁釉陶器などが出土した。これらの遺構は黒ボク層を堀り込んでおり、溝は地山層にまで達している。北寄り部分に2個のサブトレーンチを設定して地下の状況を確認し調査を終った。

#### (1) 検出遺構及び出土遺物

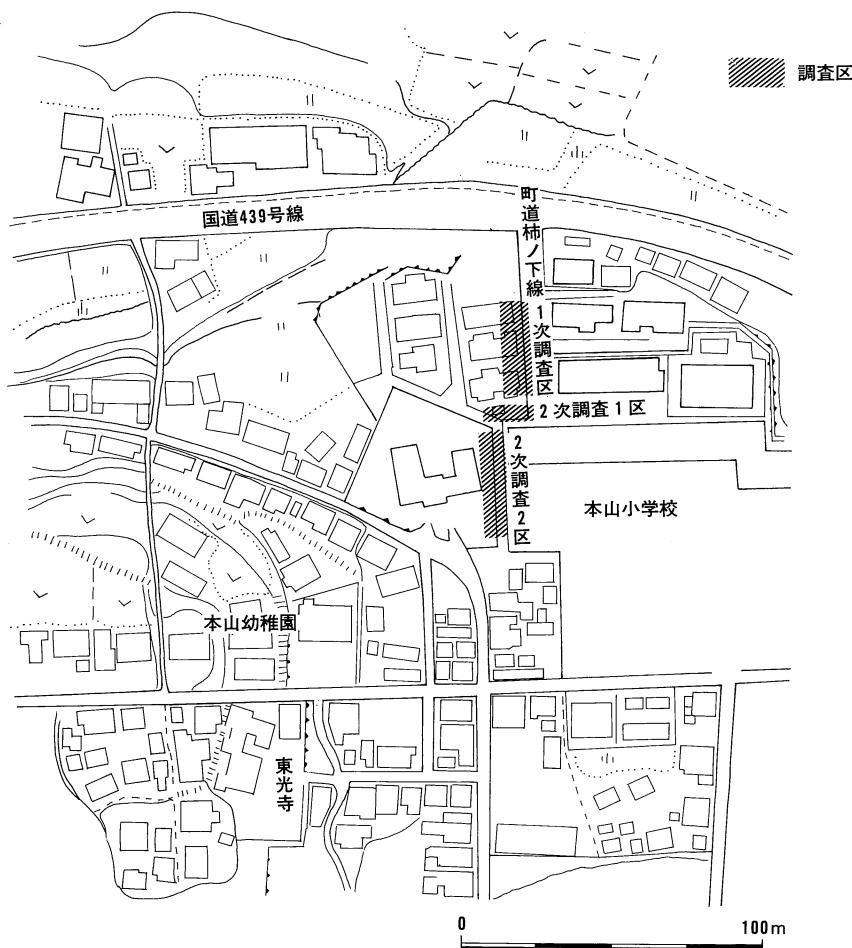


Fig 2 堀ノ尻遺跡1・2次調査位置図

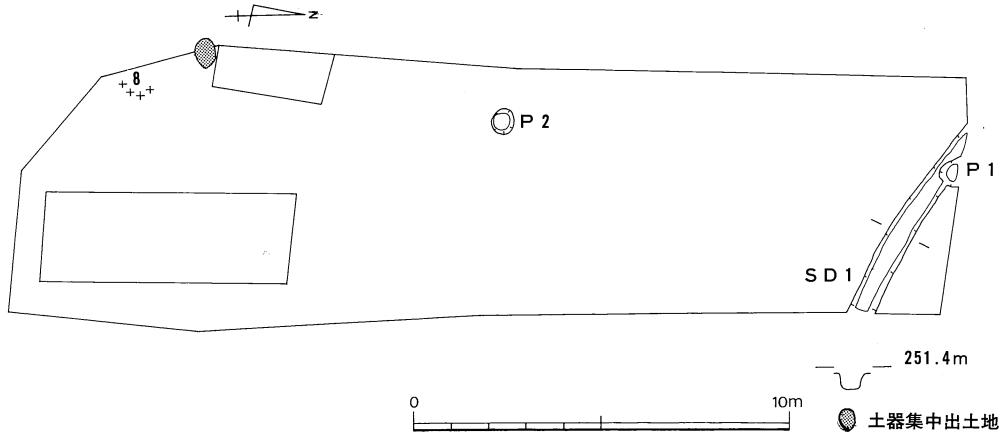


Fig. 3 1次調査検出遺構

#### SD1 (Fig. 3・4)

調査区の北端で検出した。長さ6m、幅70cm、深さ40cmを測る。断面は箱形で埋土は茶灰色粘質土単純一層で、遺物は須恵器壺蓋(1)が出土している。1は水平な天井部を有し、口縁端部は下方に摘み出しヨコナデを施している。

#### ピット

#### P1

復元径80cm前後、深さ60cmを測る。SD1と切り合っているが先後関係は不明である。埋土は茶灰色粘質土で出土遺物は認められない。

#### P2

径60cm、深さ30cmを測る。埋土はP1と同じ、遺物は認められない。

#### (2) 包含層出土の遺物 (Fig. 4・5)

弥生土器甕 (Fig. 4: 2・4~12): 2・4・6・7は、屈曲部内面に稜をなして「く」字状に外反、叩き成形で口縁部を叩き出し手法で作り出す。口縁部内面は右下りのハケ調整、胴部内面は指頭によるナデ調整を基調とするが、(7)は上胴部内面が水平方向のハケ、中位以下右下りのハケ調整後指頭によるタテ方向のナデ調整を施す。11・12は、丸味をもって外反する。11は木理の粗い原体によるハケ調整。9は平底、10は丸底風平底、12は尖底風丸底である。5・7・8は、叩き成形後ハケ調整を行うが、他は叩きのみである。叩き目は総じて太く1cmに2~3単位の叩き目が認められるが、(7)のみは1cmあたり3~4単位の細い原体が使用されている。土器胎土は、三波川帯特有の結晶片岩を多く含むが、(7)のみは結晶片岩を全く含まずチャートを多く含んでいる。(7)は叩き原体、内面の調整も他のものと異なっており搬入品と考えられる。

これらの土器はすべて黒ボク層中から出土しており、(9・11・12)はFig. 3に図示した

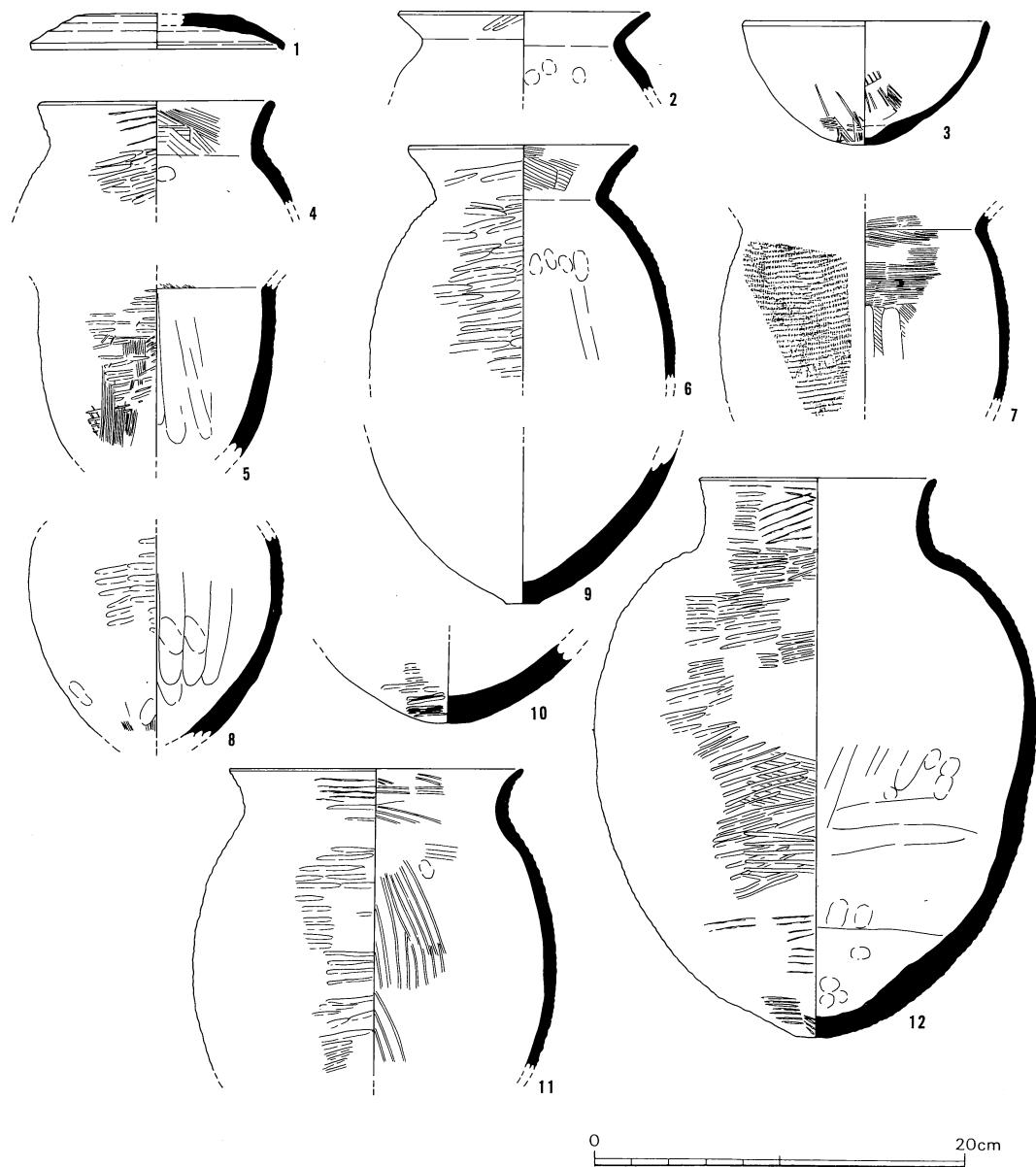


Fig 4 1次調査出土遺物実測図 (SDI : 1, 包含層 : 2~12)

スクリントーン部分から集中出土した。

弥生土器鉢 (Fig 4 : 3)

深い椀状を呈し口唇部は外傾する面をなす。丸底である。外面は叩き+ハケ調整、内面は右下りのハケ調整。胎土はチャートを多く含み結晶片岩を含まない搬入品の可能性がある。

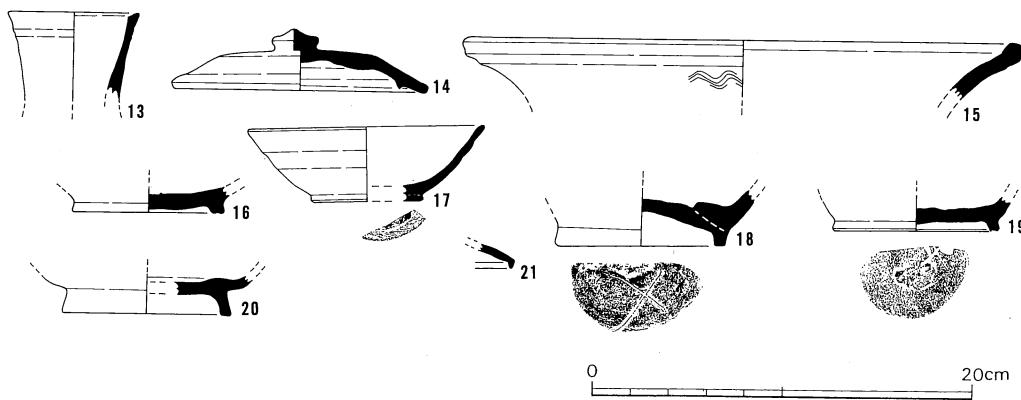


Fig 5 1次調査包含層出土遺物実測図  
(須恵器壺：13・18、同壺蓋：15、同壺身：14・21、同壺身：16・19・20、緑釉陶器：17)

須恵器壺 (Fig 5 : 13・18) わずかに外反気味に立ち上がる長頸壺で、口唇部は内傾する面をなす。内外面ヨコナデ。18は底部で高台を有し外底に×のヘラ記号がある。断面に成形痕跡を明瞭に見ることができる。

須恵器壺 (Fig 5 : 15) 大きく外反する口縁部で端部は上方に肥厚し、内面には段をなす。口縁部外面には櫛描波状文が認められる。

須恵器壺蓋 (Fig 5 : 14・21) 14は、天井部外面は水平な面をなし擬宝珠形のつまみを有す。口縁端部は丸味を帯びた面をなし、内面には形骸化したかえりを有す。ロクロの回

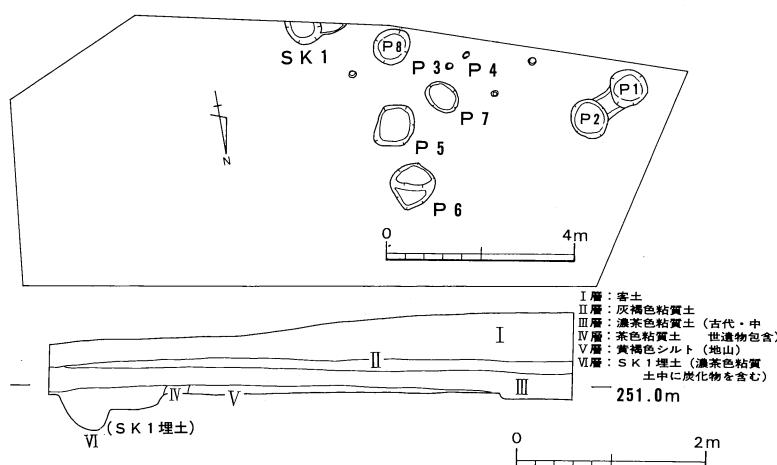


Fig 6 2次調査2区検出遺構及び南壁セクション

転は時計まわり、天井部内面は一定方向のナデ、他の部位はヨコナデを施す。21は、口縁部細片で端部を強く下方に摘み出し強いヨコナデを行う。

須恵器坏身 (Fig 5 : 16・19・20) 共に高台を有する。(16・19) の高台は低く畳付けは凹状を呈す。外底はヘラ切り後に弱いナデ調整、(19) の外底には×のヘラ記号を有す。20は高い高台を有し内外面ヨコナデ。

綠釉陶器 (Fig 5 : 17) 須恵器に施釉、釉調は深緑色を呈す。内湾しながら立ち上がり口縁部は僅かに外反する。断面観察の結果は削り出し高台か貼付高台かは明らかでない。中央部はわずかに凹み、外縁部にのみ糸切り痕を残し、中央部は削り取っている。

## 2. 2次調査

1次調査の南にある調査区で、町道がクランク状に屈曲する部分とその南側の南北に長い調査区に分かれる。前者を1区、後者を2区とする。1区は $17m^2$ 、2区は $160m^2$ を測る。

### (1) 1区の調査

#### ① 基本層序 (Fig 6)

第IV層：黄褐色シルト～粘質土層で基盤をなし、III層に整合で覆われるが西方に向かってやや下向している。

第III層：黒ボクを含む濃茶色粘質土である。層厚は18～30cm以上で西方に向かって厚さを増す。古代・中世の遺物包含層を形成する層準である。

第II層：灰褐色粘質土で層厚は0～12cmを測る。

第I層：現地表土で大部分客土である。

#### ② 検出構造・遺物

土坑1基と大小のピット11個を検出した。諸遺構は第III層を除去した後、第IV層上面で検出した。これらのうち遺物が出土したのはP 2のみである。

#### SK 1

遺構の半分以上が調査区外に出ており規模・性格は不明である。基本層序南壁部分での深さは26～46cmで2段に掘り込まれている。埋土は第III層に似ているが、炭化物や第IV層が小ブロックをなして入っている。

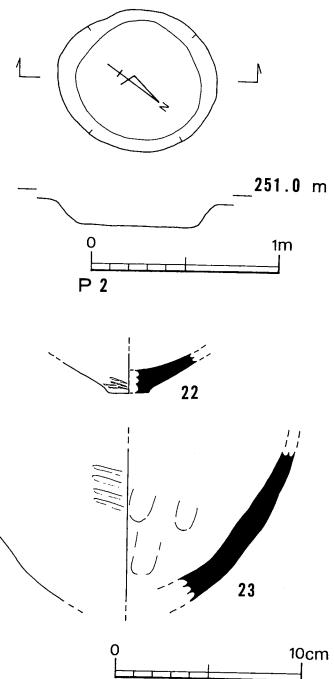


Fig. 7 2次調査1区P 2実測図及び出土遺物実測図

## P 2 (Fig 7)

70×86cmの楕円形のプランを呈し深さ12cmを測る。埋土は赤味がかった褐色の粘質土で、検出面及び埋土中より弥生土器細片が多く出土したが、図示し得たものは(22・23)のみである。共に叩き成形の甕で、22は平底の底部細片。23は下胴部、外面右下りの叩き内面は指頭によるナデ調整。

### その他のピット

規模及び深さは右の表に示した。P 1・5・7・8は、濃茶色粘質土に第IV層の黄褐色土層及び黒色粘質土がブロック状に入っている。P 3・4は、濃茶色粘質土である。

ピットNo	規 模(cm)	深さ(cm)
P 1	径80	25
P 2	70×86	12
P 3	径20	22
P 4	15×20	13
P 5	80×90	20
P 6	90×90	30
P 7	60×75	10
P 8	70×80	19

## (2) 2区の調査

長さ33m、幅4mの南北に長い調査区である。東側部分は後世の掘削により大きく搅乱を受けている。土坑5基、ピット多数、不明遺構が2基出土している。

### ① 基本層序 (Fig 9)

1次調査で地山層を整合で覆っていた黒ボク層の形成は認められず、VII層(地山)の上は遺構埋土(VI層)及び古代の遺物包含層(V層)で覆われている。2区の遺構検出面は、1次調査に比べて0.5~1m程標高が高くなっている。2区は古代以降に削平を受けている可能性がある。

第VIII層：黄褐色シルト～粘質土で基盤を形成しており、北に向って緩やかに下向している。

第VII層：茶色粘質土でSX 1の埋土である。

第VI層：VII層とVI層の間に部分的に堆積している。地山(第VIII層)の二次堆積土である。

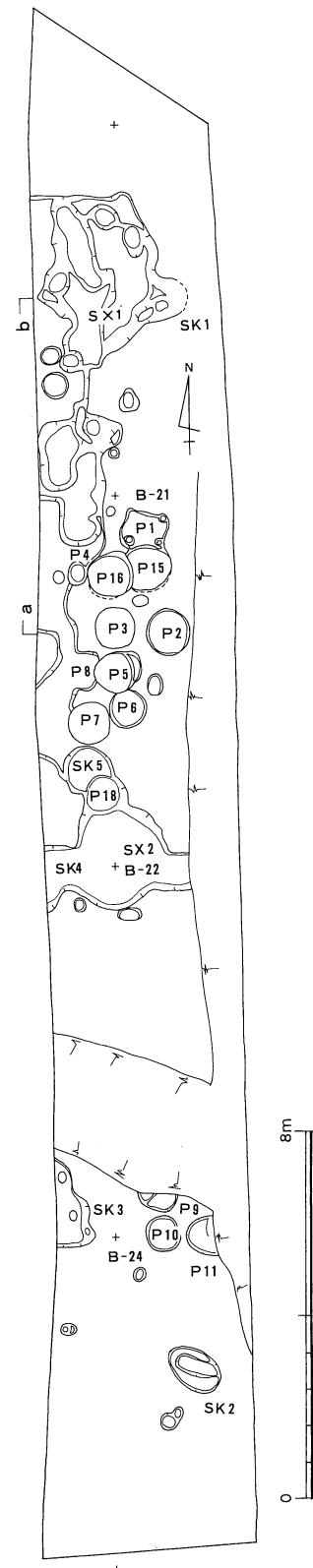


Fig 8 2次調査2区検出 遺構実測図

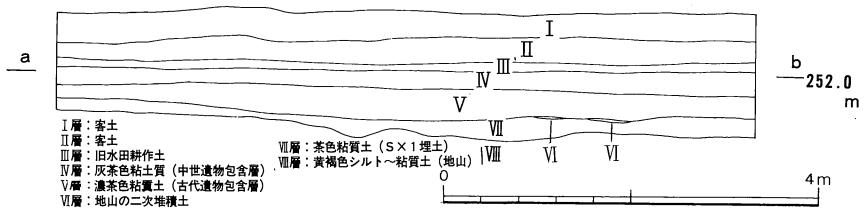


Fig 9 2次調査2区西壁セクション

第V層：濃茶色粘質土で古代の遺物包含層である。層厚は14~36cm、第IV層に整合で覆われている。

第IV層：灰茶色粘質土で中世の遺物包含層である。層厚は20cm前後を測る。

第III層：旧水田耕作土で、層厚は6~10cmを測る。

第II層：客土の砂層である。

第I層：現地表土であるが、明らかに客土である。

## ② 検出遺構と遺物

### a) Fig10

#### SK 1

調査区の北部にありSX 1と切り合っており、かつ東壁側が大きく攪乱されているために正確なプラン・規模は不明である。残存長1m前後、深さ45cm（推定）を測る。埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より須恵器坏（27）が出土している。27は、断面方形のしっかりした高台を有し畳付けは凹状を呈す。外底は、左←右への擦痕が認められる。内面はヨコナデを施す。

#### SK 2

調査区の南端にあり橢円形のプランを呈し、長軸1.25m、短軸0.8m、深さ10~20cmを測る。埋土は黒ボクを含んだ黒褐色粘質土で、遺物は認められない。

#### SK 3

調査区の南部にある。大部分が調査区外にあり正確なプラン・規模は不明である。不整形を呈し確認部分の長軸は1.78m、深さは10cmを測る。床面に径20cm、深さ20cmの小ピットが2個あり、東北隅にも突出するかたちで径20cm前後、深さ20cmのピット状の落ち込みがある。これらのピットは、SK 3に伴うものかどうか不明である。埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より土師器椀の底部片（28）が出土している。明らかに搬入品である。

#### SK 4

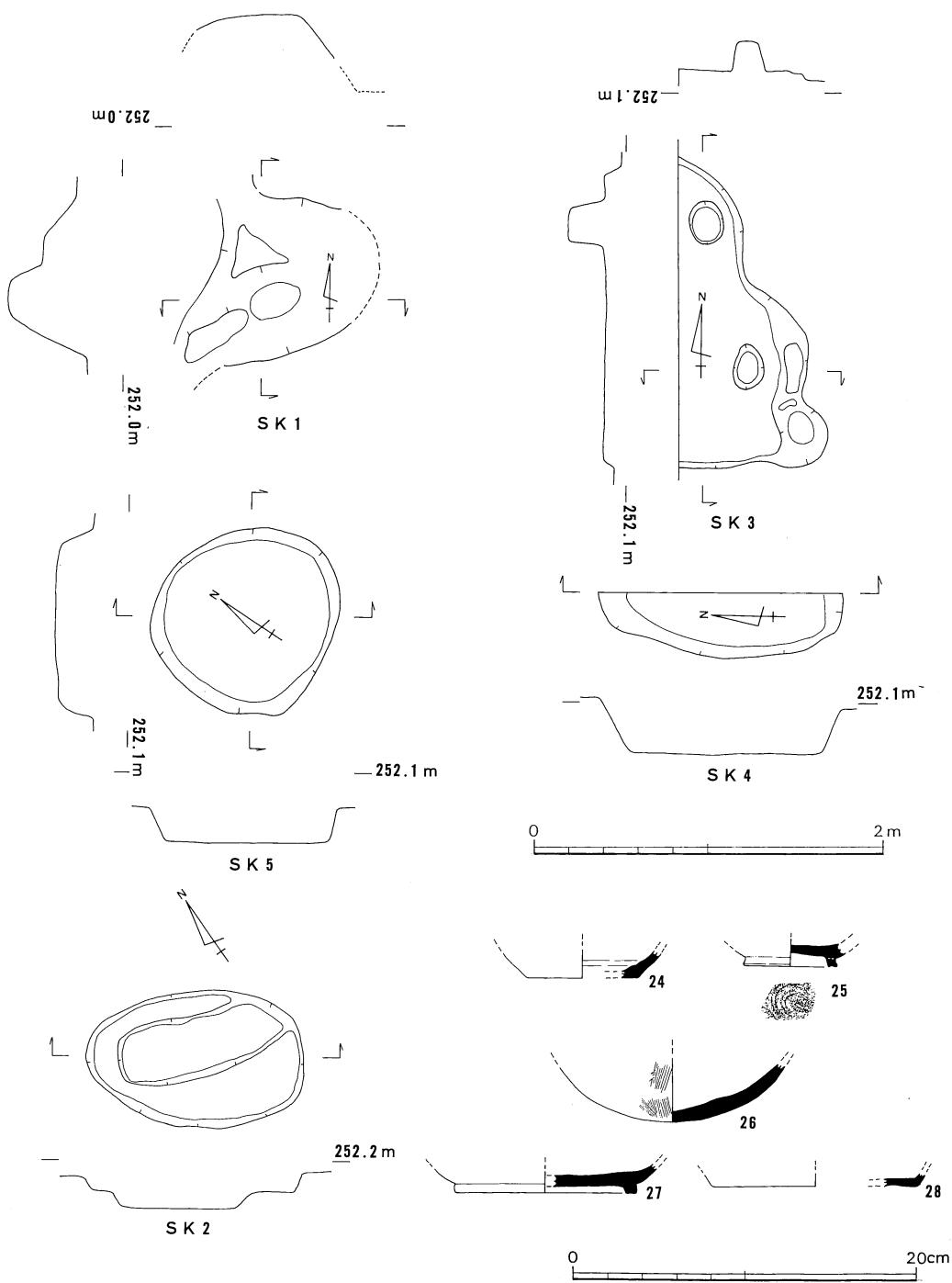


Fig 10 SK1～5実測図及び出土遺物実測図 (SK 1 : 27, SK 3 : 28, SK 4 : 24・25, SK 5 : 26)

調査区の中央部に位置しSX 2を切っている。半分以上が調査区外に出ており正確なプラン・規模は不明であるが、橢円形を有するものと考えられ長軸1.4m、短軸0.7mを推定することができる。埋土は濃茶色粘質土で埋土中より土師器壺(24)、須恵器碗(25)が出土している。24は、口クロ成形で外底糸切り、内面にロクロ目を残す。(25)もロクロ成形糸切り後、外縁に高台を貼付している。畳付は凹状を呈す。

#### SK 5

調査区の中央部にあり、P18を切っている。1.1×1.04mの橢円形プランを有し、深さ20cmを測る。床面は平坦で壁は斜めに立ち上がる。埋土は濃茶色粘質土で埋土中より丸底の甕底部(26)が出土している。弥生後期終末～古式土師初頭に属する。

#### (b) ピット (Fig 11)

#### P 2

調査区の中央部にある。ほぼ正円形のプランを呈し径1m、深さ50cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より須恵器蓋口縁部(35)が出土している。口縁部は下方に摘み出されヨコナデを施す。

#### P 5

調査区中央部にある。85×80cmの橢円形を呈す東壁側の検出面付近が二段に堀り込まれているが、この段部は本来P 5に伴うものかどうか不明である。深さ50cmを測り床面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がり、部分的にはオーバーハンプグしている。床面より10数cm浮いて20cm大の河原石が2個重なっている。埋土は黒褐色粘質土で須恵器壺(34)、須恵器壺底部(36・40)が出土している。34は直線的に立ち上がり端部は丸くおさめる。36は外面時計まわりの削り後ヨコナデ、内面はロクロ目が残る。底部外縁に断面方形の貼付高台を有す。40は外面反時計まわりの削り後ヨコナデ、内面はロクロ目が顕著に残る。底部の高台は剥落。

#### P 7

調査区中央部にある。95×90cmの橢円形のプランを呈し深さ20cmを測る。床面は平坦面をなし、壁は一部オーバーハンプグしている。埋土は黒褐色粘質土で、須恵器壺(31)と同甕(39)が出土している。31は、断面台形の低い高台が外縁端部につく。内外面ヨコナデ、ロクロは反時計まわり、39は強く外反する口縁部で端部は玉縁状に肥厚する。内・外面ヨコナデ。

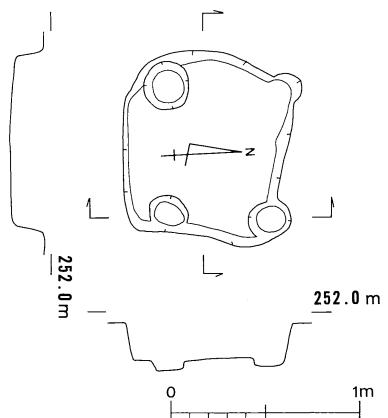


Fig 11 P1実測図

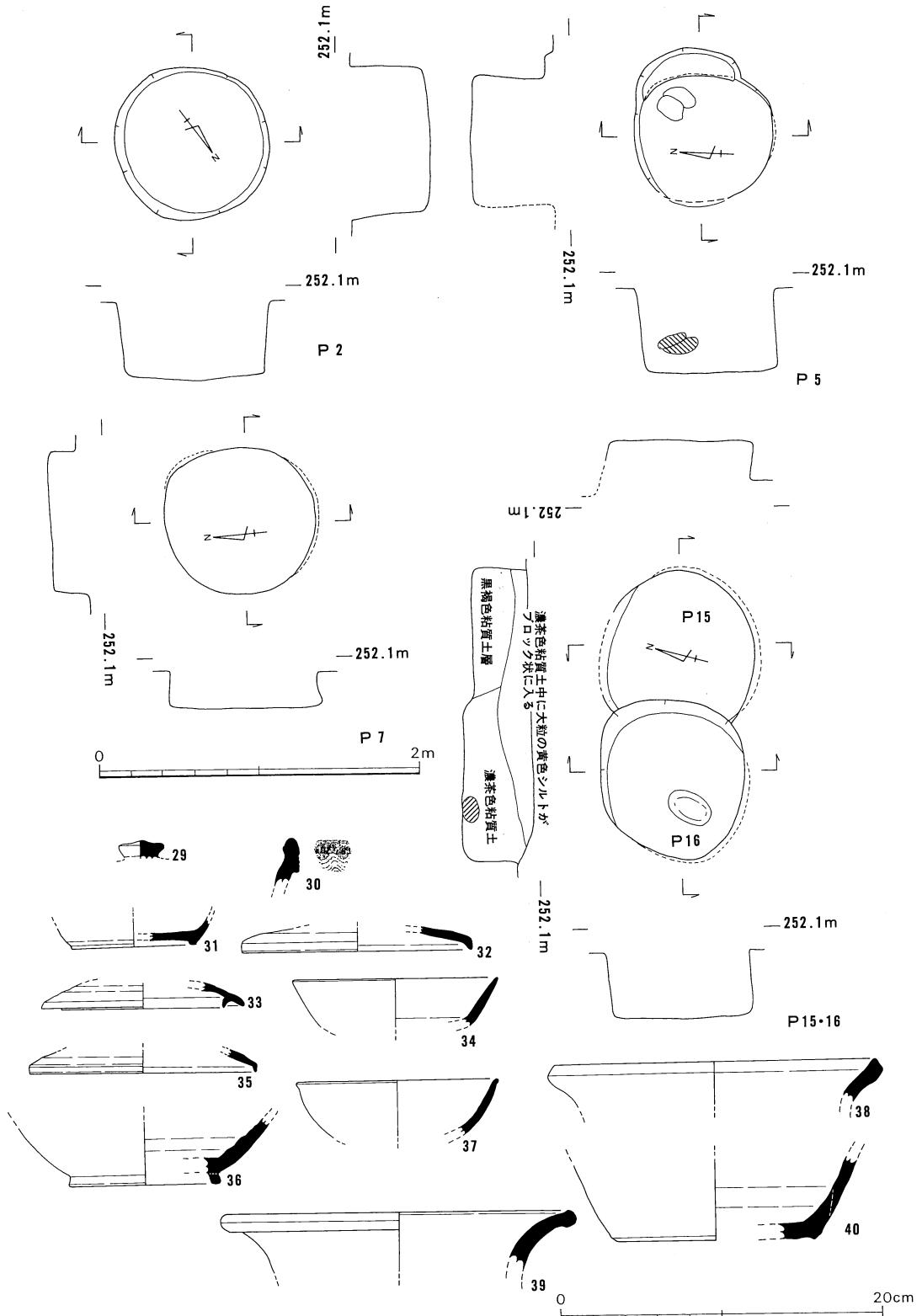


Fig 12 P 2 · 5 · 7 · 15 · 16実測図及び出土遺物実測図

P 15

調査区中央部にありP16に切られている。1.1（推定）×0.98mの楕円形を呈し深さ36cmを測る。床面は平坦で壁はオーバーハンプグしている。埋土はI層：濃茶色粘質土中に大粒の黄色シルトをブロック状に含む、II層：黒褐色粘質土であるが、I層は攪乱層の可能性が強い。I層中より須恵器蓋（32）が出土している。口縁部は下方に強く屈曲、天井部外側はヘラ削りが顕著、ロクロは時計まわり、他の部位はヨコ方向のナデ。

P 16

1.0×0.8mの隅丸方形のプランを呈し深さは45cmを測る。床面は平坦面をなし床面に20cm大の河原石がおかれている。I層は、P 15と共通の攪乱層、II層は濃茶色粘質土であり、須恵器坏蓋（29・33）が出土している。

④ 性格不明の落ち込み

SX 1 (Fig 13・14)

調査区の北半分を占めている。溝とも土坑とも言えない落ち込みで、しかも他の遺構とも切り合っており複雑なプランを呈す。深さも数cmから最深50cmを測り凹凸が激しい。遺物は須恵器を中心に比較的多く出土している。

須恵器坏蓋 (Fig 14: 41~47・49・51)

41は天井部外縁に沈線、口縁端部は丸くおさめる。ロクロは時計まわり。42・43は口縁部内面にかえりを

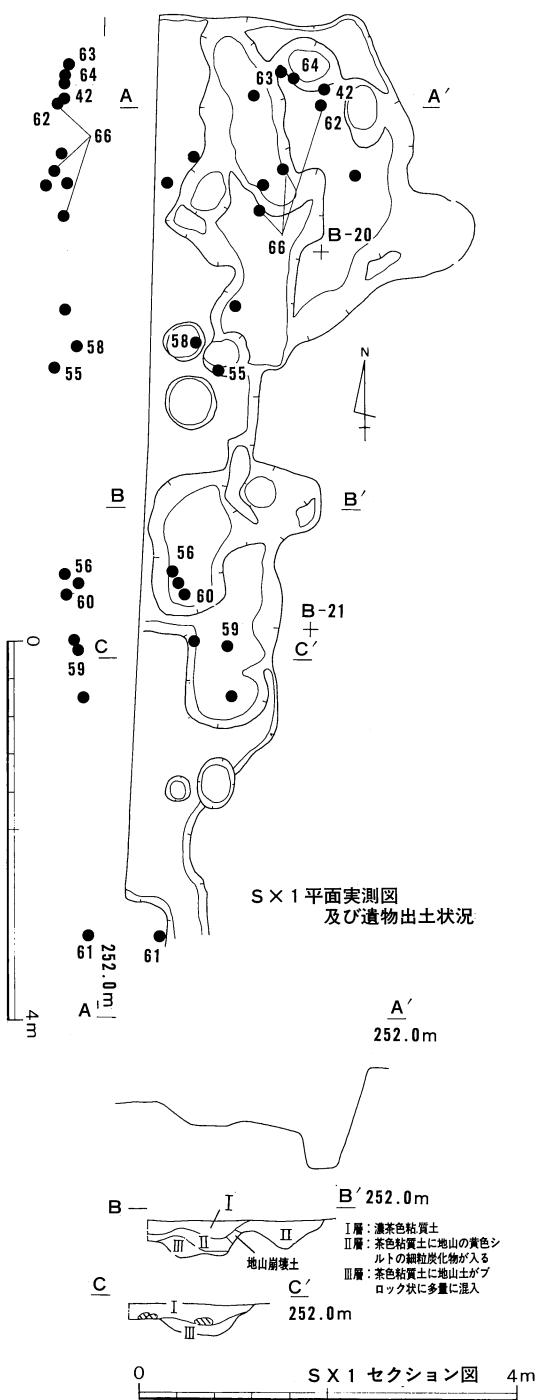


Fig 13 SX 1 平面図・セクション及び  
遺物出土状況

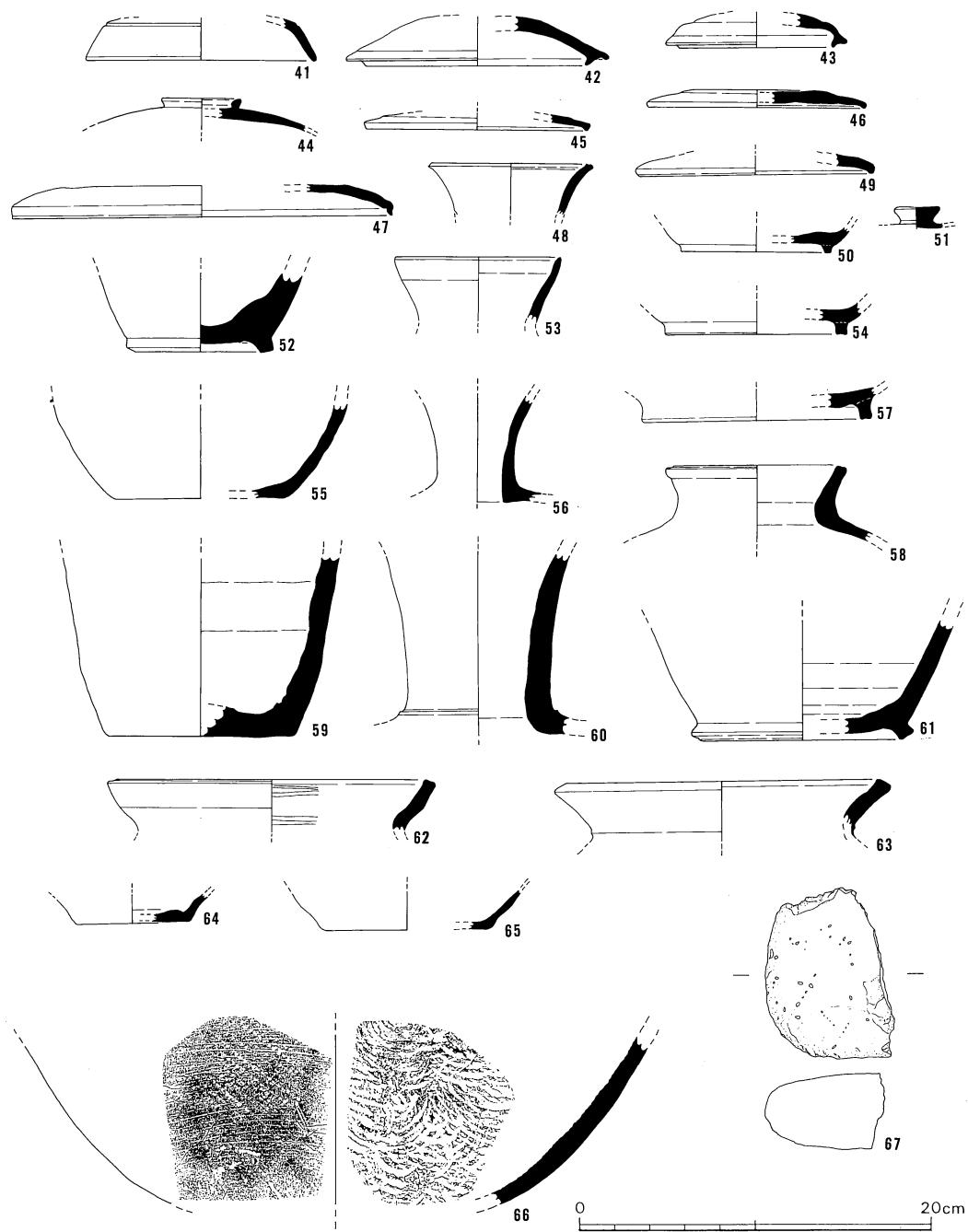


Fig 14 SX 1 出土遺物実測図  
須恵器壺蓋：41～47・49・51、同壺身：50・54・57、同壺底部：48・53・60・58、同壺底部：52・55・59・61、同甕：63・66、土師器甕：62、同壺：64・65

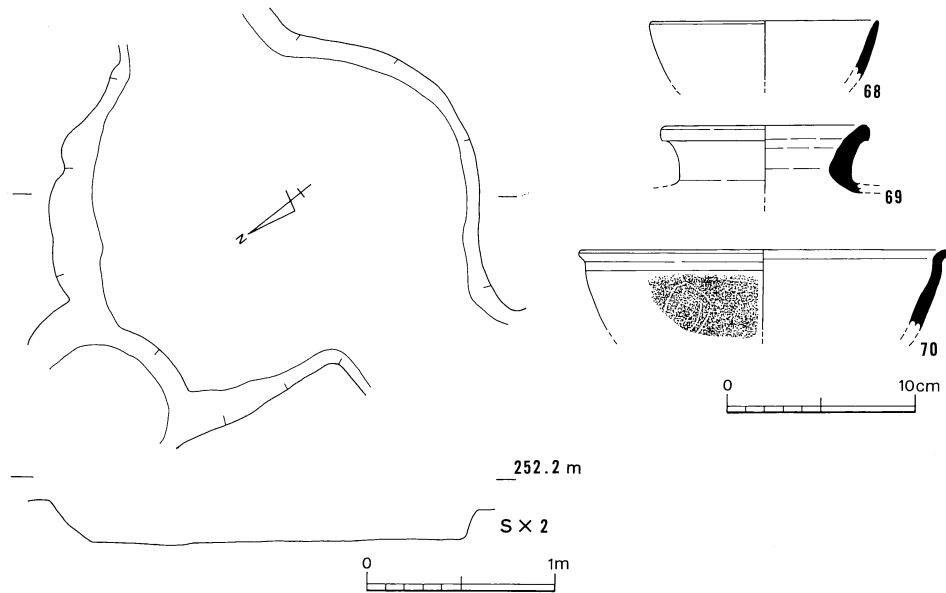


Fig 15 SX 2 実測図及び出土遺物実測図

有す。42の天井部は丸味を帯び外面中央部付近にヘラ削り（砂粒は左・右両方に動いていいる）、他の部位はヨコナデ、44は環状のつまみを有す。全面ヨコナデであるがつまみ付近はヨコナデの下地にヘラ削り（砂粒は左・右に動く）が認められる。45・46は、天井部外面が段状をなし口縁端部は下方に摘み出す。47は、口縁を下方に屈曲させ強くヨコナデを施す。49の口縁端部は丸味をもってわずかに下垂。51は擬宝珠形つまみである。

#### 須恵器壊身 (Fig 14 : 50・54・57)

50は、底部外縁に断面台形の高台を貼付。54は断面長方形の高台を有し畳付けは凹状をなす。

#### 須恵器壺口頸部 (Fig 14 : 48・53・56・58・60)

48はラッパ状に外反する口縁部を有し、端部を摘み出してヨコナデを施す。53は、口縁部がわずかに内側に屈曲、端部は丸くおさめている。56・60は長頸壺頸部で、56は屈曲部

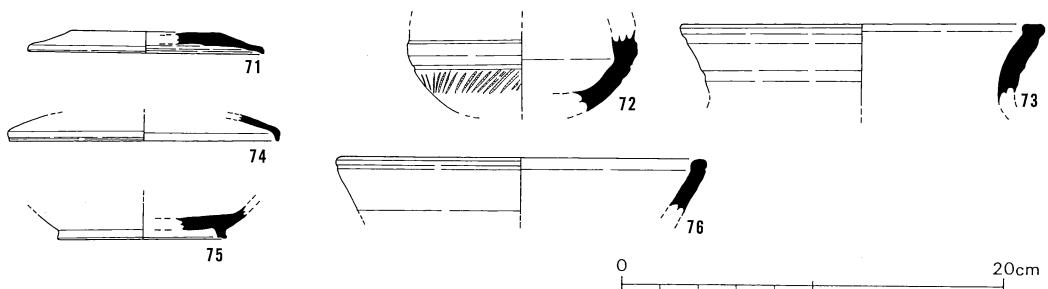


Fig 16 包含層出土遺物実測図

内面が鋭い稜をなす。60は頸胴部壠に鋭い稜線が走る。58は短頸壺で外方に直線的に立ち上がり口唇部は凹状をなす。

須恵器壺底部 (Fig 14 : 52・55・59・61)

52・61は外方に踏ん張る断面方形の高台を有す。前者の外面にはヘラ削り（ロクロは時計まわり）が顕著に見られる。61はヨコナデ仕上げで畳付けは凹状を呈す。55は、丸味をもって立ち上がる。59は、底部から強く屈曲し直線的に立ち上がる。内面に粘土紐の接合痕跡を明瞭に認める。

須恵器壺 (Fig 14 : 63・66) 63は、「く」字状に外反する口縁部を有し端部内面をわずかに内側に肥厚。66は下胴部片で外面は叩き後ヨコナデ、内面は青海波文。

土師器壺 (Fig 14 : 62) 口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は凹状をなしわざかに内側に肥厚。内面に横位のハケ調整。

土師器壺 (Fig 14 : 64・65) 64はロクロ成形糸切り。65はヘラ切りである。

砥石 (Fig 14 : 67) 両主面が研磨されている。石英粗面岩製である。

SX 2 (Fig 15)

調査区の中央部にありSK 4に切られている。長軸2.3m、短軸1.9m（推定）、深さ20～30cmを測る。埋土は濃茶色粘土で炭化物や焼土細片を含む。埋土中より須恵器鉢（68・70）と壺（69）が出土している。68は碗状を呈し端部は丸くおさめる。70は口縁部を強く外方に屈曲させ強い横ナデを施す。外面にヘラ記号あり。69は、外反する口縁部を有し端部は玉縁状を呈す。

④包含層出土の遺物 (Fig 16)

須恵器壺蓋 (71・74) 71は、水平な天井部を有し口縁部は下方に摘み出す。74は丸味をもった天井部を有し、口縁部は下方に屈曲し内外面強いヨコナデを施す。

須恵器壺身 (75) 断面長方形の高台を貼付。

須恵器壺 (72) 装飾壺の下胴部である。器壁が顯しく厚く、外面に櫛原体による列点文を施す。

須恵器壺 (73) 口縁部は外反、端部は内外に肥厚、口唇部は幅広い面をなす。

須恵器鉢 (76) 直線的に立ちあがり端部は短く内側に屈曲。内外面ヨコナデ。

## 第IV章 まとめ

堀ノ尻遺跡は、弥生時代末から平安時代にかけて営まれた遺跡であることが明らかとなつたが、調査区が狭小であることや後世の攪乱にも原因して検出遺構の性格や詳細な時期比定を行うことができない。ここでは遺物を中心にして若干の考察を行いまとめとしたい。

当遺跡周辺は、高知県中央部の中にあって縄文遺跡の分布密度が最も高いところであるが、弥生前期・中期の遺跡は稀薄であり後期後半に至って急増する傾向にある。当遺跡の西方には永田遺跡、銀杏の木遺跡、松ノ木遺跡などの後期後半から古墳時代前期初に営まれた集落遺跡が確認されており、堀ノ尻遺跡1次調査から出土した弥生後期末の土器群も吉野川流域における一連の集落増加の現象のなかで把握することができる。これらの土器は包含層出土のものであるが、型式的には土佐の後期7期に位置付けられる資料である。<sup>(1)</sup> 鉢が1点出土している他は、すべて甕であり、当該期の土器組成一般のあり方を示している。

本県においては、古墳時代前・中期の古墳及び遺跡は極めて僅少であるが、当遺跡においても前・中期の遺物は存在せず、6世紀代の須恵器（41）が1点出土しているのみである。次いで7世紀代に属する須恵器の蓋に返りを有する段階のものが1次調査の包含層（14）、2区のP16（33）SX1（42）が出土しており、当遺跡の小画期をなしている。

出土遺物で主体を占めるのは、8世紀末から9世紀前半に属する須恵器である。坏蓋・身、壺がある。蓋は、擬宝珠形つまみを有するもの（29・51）や環状つまみを有するもの（44）、きわめて扁平な頂部を有し端部を下方につまみ出すもの（1・45・46・49・71）が存在する。坏身は高台を有するものが多く（16・19・25・27・54・75）、これらの高台は例外なく畠付けがヨコナデにより凹状を呈し、外底には比較的弱いへラ削りが認められる。また注目すべき遺物として、緑釉の坏（17）を挙げることができる。この坏の特徴としてはすでに述べたように、断面観察から第一次成形後に円盤状高台を貼付したものか、削り出しによるものかを唆別することはできないが、糸切りの残痕と削り調整から見て、平尾政幸氏分類による削り出し・円盤状高台を有するI-A類に最も近似するタイプである。<sup>(2)</sup> 嶺北地域における緑釉陶器の出土は初めてのことであり、今後周辺部を含めた当遺跡の性格付けを考える上で重要な資料となる。

延暦16年（797）に新設された古代官道の吾橋駅（『日本後記』）を、当遺跡周辺に比定する研究者もあり（延暦新道）、<sup>(3)</sup> 駅の設置と今次調査の出土遺物のピークが一致することは興味深い現象である。

#### 註

- (1) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』　古代学協会四国支部第4回大会資料　1990年
- (2) 平尾政幸「右京三条三坊の平安時代の遺物の検討」『平安京右京三条三坊』　京都市埋蔵文化財研究所　1990年
- (3) 前田和男「古代土佐の官道について」『高知の研究』2　清文堂　1982年

## 遺物観察表

掲番号	出土位置	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考 (胎土)
Fig4-1	第1次調査 SD 1	須恵器杯 蓋	13.7 2.0 — —	水平な天井部から直線的に下降し口縁部にいたる。	口縁端部は下方に摘み出し。ヨコナデ。		
〃-2	〃 遺物包含層	弥生土器 甕	13.6 (4.4) — —	口縁部は丸味をもつて強く「く」字状に外反。	右上がりの叩き成形。口縁部叩き出し。胴部外面叩きのうえでナデ消す。胴部内面に指頭圧痕顕著。	粗粒砂、小礫を含む。 チャート、長石、石英、結晶片岩。	
〃-3	〃 〃	〃 鉢	13.0 6.5 — —	丸底で底部が突出気味。 椀状の深い体部。	外面：叩き+ハケ。 内面：ハケ。	三波川帯の土を使っていない。 搬入品の可能性あり。	
〃-4	〃 〃	〃 甕	12.6 (5.7) — —	口縁部は丸味をおびて外反。端部面取り。	外面：叩き(右上がり)、口縁部叩き出し。 内面：右下がりハケ。	粗粒砂、小礫を含む。 結晶片岩、チャート、外面焼ける。	
〃-5	〃 〃	〃 〃	— (9.4) 12.8 —	最大径を口縁部に有し胴部は全く張らない。	外面：叩き(右上がり)、中位以下は叩き+ハケ。 内面：指頭によるナデ。	粗粒砂、小礫を多く含む。 チャート小礫多。 外面焼ける。	
〃-6	〃 〃	〃 〃	12.4 (12.9) 16.6 —	口縁部は「く」字状に外反。最大径を胴部中位に有す。著しく長胴。	外面：叩き(右上がり)、口縁部叩き出し 内面：口縁は右下がりのハケ、胴部は指ナデ。	粗粒砂、小礫を多く含む。 外面焼ける。	
〃-7	〃 〃	〃 〃	— 15.6 —	口縁部は「く」字状に外反。胴部の張りはほとんどなく、最大径を口縁部に有す。	外面：叩き+ハケ。 内面：水平方向のハケ、胴部下半は右下がりのハケ+指ナデ。 叩き原体が他のものに比べ著しく細い。	粗粒砂、小礫を多く含む。 チャートを多く含み結晶片岩を全く含まない。 搬入品。外面焼ける。	
〃-8	〃 〃	〃 〃	— 14.0 —	卵倒形の体部。	外面：水平方向の叩き、下半はナデ、ハケ 内面：指ナデ	細・粗粒砂、小礫を多く含む。 結晶片岩、石英他。底部付近被熱赤変。	
〃-9	〃 〃	〃 〃	— — — 1.8	わずかに平底をとどめる。	内・外面：ナデ調整なるも外面底部付近にわずかに叩きを認める。	大粒の小礫。 結晶片岩、チャート。	
〃-10	〃 〃	〃 〃	— — — 2.0	丸底風平底。	外面：叩き。 内面：ナデ。	粗粒砂、小礫多量。 結晶片岩、石英、長石。	
〃-11	〃 〃	〃 〃	16.0 (16.4) — —	口縁部は丸味をもつて外反。端部は尖り気味。	外面：叩き(水平方向)、口縁部叩き出し。 内面：口縁部水平方向、胴部右下がり。 ハケ原体は荒い。	粗粒砂、小礫、石英、結晶片岩。 外面焼け。	
〃-12	〃 〃	〃 〃	12.9 30.8 24.0 1.8	わずかに平底をとどめる。口縁部は直立気味で端部が外反。	外面：叩き。口縁部叩き出し。 内面：指頭圧痕が顕著。	粗粒砂、小礫。 長石、石英他。	
Fig5-13	〃 〃	須恵器 壺	7.0 — — —	ゆるやかに外反しながら立ち上がる長頸壺。口唇部は面をなす。	内・外面：ヨコナデ。	精選された胎土。	
〃-14	〃 〃	〃 杯 蓋	13.2 3.2 — —	天井部は水平な面をなし、ほとんど直線的に下降し口縁部にいたる。端部は丸味をおびた面をなし、内面に形骸化したかえりを有す。擬宝珠つまみ。	天井部外面：左→右のヘラ削り。 内面：一定方向のナデ。 他の部位はヨコナデ。	ロクロは右廻り。	
〃-15	〃 〃	〃 甕	29.0 — — —	ラッパ状に外反する口縁で端部は角張り内側に段をなす。	外面に櫛描波状文。 全面ヨコナデ。	細粒砂を含む。	

## 遺物観察表

挿図番号	出土位置	器種	法量 （cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考 (胎土)
Fig5-16	第1次調査 遺物包含層	須恵器 杯身	高台径 8.0	わずかに外方に張り 出す高台。豊付けは 凹状を呈す。	内底はハケ状原体による不定方向のナデ。	細粒砂を含む。
〃 -17	〃	綠釉 杯	12.5 3.9 — 5.9	須恵器に施釉。底部 から内湾して立ち上 がり、端部がわずか に外反。外底糸切り 痕を外縁部のみにと どめ内側は削り取っ ている。	底部外縁部を面取る。底部の断面に接合痕を 明瞭にとどめている。円盤のうえに粘土をま きあげていることがわかる。	ロクロは左廻り。 釉は暗緑色。
〃 -18	〃	須恵器 壺	高台径 9.0	断面長方形の高台。	底部成形後に粘土紐をまき上げていることが 判る。	外底に×のヘラ記号。
〃 -19	〃	〃 杯身	高台径 8.8	外方に開く高台。豊 付けは凹状。	外底に弱い擦痕あり。内底にロクロ目。一定 方向のナデ。	〃
〃 -20	〃	〃 杯	高台径 9.0	高い高台。	全面ヨコナデ。	
〃 -21	〃	須恵器 杯蓋	— — — — — (2.0)		口縁部を下方に摘み出し、強いヨコナデ。	細粒砂を含む。
Fig7-22	第2次調査 P2	弥生土器 甕	— — — — (2.0)	平底。	外面：右下がり叩き。	細・粗粒砂を含む。 チャート、石英、他。
〃 -23	〃	〃 碗	— — — — —		外面：右下がり叩き＋ナデ。 内面：指頭圧痕著。	細・粗粒砂・小礫を含 む。 チャート、石英、長石 他。
Fig10-24	〃 SK 4	土師器 杯	— — — 6.5	底部から内湾気味に 立ち上がる。	ロクロ成形、糸切り。 内面ロクロ目顯著。	精選された胎土。
〃 -25	〃	須恵器 椀	高台径 5.4	外方に開く断面方形 の高台。豊付けは凹 状を呈す。	外底に糸切り痕。	〃
〃 -26	〃 SK 5	古式土師器 甕	— — — —	丸底。	外面：叩き＋ハケ。 内面：指頭圧痕。	小礫を多く含む。 チャート多。
〃 -27	〃 SK 1	須恵器 杯身	高台径 10.6	断面方形の高台。豊 付けは凹状を呈す。	外面：丁寧な削りで平滑な面に仕上げる。 内底：ヨコナデ。	
〃 -28	〃 SK 3	土師器 椀	— — — 12.0		外面：ヨコナデ。 内面：ヨコ方向ナデ。	搬入品。
Fig12-29	〃 P16	〃 杯蓋	— — — —	擬宝珠つまみ。	全面ヨコナデ。	精選された胎土。
〃 -30	〃 P15	〃 甕	— — — —	口縁部が肥厚。外面 に櫛描波状文。		〃
〃 -31	〃 P7	〃 杯身	高台径 7.8	断面台形状の低い高 台。	外底：ナデ。 外の部位はヨコナデ。	〃

## 遺物観察表

挿図番号	出土位置	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考 (胎土)
Fig12-32	第2次調査 P15	須恵器 杯蓋	14.6 — — —	口縁部は下方に折り曲げる。端部は丸くおさめる。	天井部外面は縁部を除いて左→右のヘラ削り。 ヨコナデ。	ロクロは右廻り。	
〃 -33	〃 P16	〃	10.2 — — —	天井部から丸味を帯びて下向。口縁内面にしっかりしたかえりを有し端部は尖る。	全面ヨコナデ。	精選された胎土。	
〃 -34	〃 P5	〃 杯身	13.0 — — —	直線的に外方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	〃	細粒砂を含む。	
〃 -35	〃 P2	〃 杯蓋	14.4 — — —	口縁部は下方向につまみ出す。	〃	〃	
〃 -36	〃 P5	〃 壺	高台径 9.2	断面長方形の高台が外方に開いてつく。	ロクロは時計廻り。 内・外面ヨコナデ。	〃	
〃 -37	〃 P1	〃 椀	12.6 — — —	内湾して立ち上がり端部がわずかに外反する。	口縁端部を摘み出しヨコナデ。	〃	
〃 -38	〃 P15	〃 甕	20.0 — — —	口縁部はゆるやかに外反し、端部付近でわずかに内湾。口唇は幅広い面をなす。	ヨコナデ。	〃	
〃 -39	〃 P7	〃 壺	21.4 — — —	口縁部は強く外反し、端部は玉縁状を呈す。	〃	〃	
〃 -40	〃 P5	〃 〃	底径 (12.6)	底部から直線的に立ち上がる。高台が剥落。	断面に粘土紐接合部を明瞭に認めることができる。 ヨコナデ。		
Fig14-41	〃 SX1	〃 杯蓋	13.2 — — —	天井部外縁に沈線。口唇部は丸くおさめる。	ロクロは時計廻り。	細・粗粒砂を含む。	
〃 -42	〃 〃	〃 〃	15.0 — — —	天井部から丸味を帯びて下降。口唇部は丸くおさめる。内側にしっかりしたかえり。	天井部ヘラ削り(左→右)。 ヨコナデ。	細粒砂を含む。	
〃 -43	〃 〃	〃 〃	10.4 — — —	口縁部は丸くおさめる。内側にかえりがある。	口縁部をつまんで強くヨコナデ。	〃	
〃 -44	〃 〃	〃 〃	つまみ径 4.6	環状のつまみを有す。	天井部外面、ヘラ削り(左→右)後ナデ。 ロクロは時計廻り。		
〃 -45	〃 SX1	須恵器 杯蓋	12.8 — — —	天井部外縁は段状をなす。口縁端部は断面三角形。	天井部外縁をつまんで強いヨコナデ。口縁端部は下方につまみ出しヨコナデ。	細粒砂を含む。	
〃 -46	〃 〃	〃 〃	12.4 — — —	天井部は段をなす。口縁端部は断面三角形。	〃	〃	
〃 -47	〃 〃	〃 〃	22.0 1.8 — —	天井部から丸味を帯びて下降。口縁は下方に屈曲。端部は尖る。		器表の荒れが激しい。 細粒砂を含む。	

## 遺物観察表

掲図番号	出土位置	器種	法量 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備考 (胎土)
Fig14-48	第2次調査 SX 1	須恵器 壺	9.0 — — —	口縁部はラッパ状に外反。口唇部は部分的に凹状を呈す。	ヨコナデ。	細・粗粒砂を含む。
〃 -49	〃 〃	〃 杯蓋	13.4 — — —	口縁端部は、丸くおさめる。	口縁端部をつまみ出してヨコナデ。	細粒砂を含む。
〃 -50	〃 〃	〃 杯身	高台径 8.6	断面台形の高台を貼付。	ヨコナデ。	細・粗粒砂、小礫を含む。
〃 -51	〃 〃	〃 杯蓋		擬宝珠つまみ。頂部水平、断面逆台形。	〃	細粒砂を含む。
〃 -52	〃 〃	〃 壺	高台径 8.4	断面方形のしっかりした高台が、外方にふんばってつく。	高台内面を強くナデ。外面ヘラ削り(左←右)、ロクロは反時計まわり。	粗粒砂、小礫を含む。
〃 -53	〃 〃	〃 〃	9.6 — — — —	頸部からゆるやかに外反し、口縁部付近でわずかに内側に屈曲。	口縁端部丸くおさめる。 ヨコナデ。	
〃 -54	〃 〃	〃 杯身	高台径 10.4	断面方形の高台が垂直に付く。畳付けは凹状を呈す。	ヨコナデ。	細粒砂を含むも、全体に選精された胎土。
〃 -55	〃 〃	〃 壺	— — — 10	底部から内湾気味に立ち上がる。	外底は未調整か。他の部位はナデ、ヨコナデ。	細・粗粒砂。小礫を含む。
〃 -56	〃 〃	〃 〃	— — — —	長頸壺の頸部。屈曲部内面は鋭い稜をなす。大きくカーブを描きながら立ち上がる。	ヨコナデ。	細粒砂を含む。
〃 -57	〃 〃	土師器 杯	高台径 13.2	比較的高目のしっかりした高台。畠付けは凹状を呈す。	高台内・外面を強くヨコナデ。	精選された胎土。
〃 -58	〃 〃	須恵器 壺	10.0 — — — —	短頸壺。口縁は丸味をもって外反し直線的に外方に立ち上がる。口唇はわずかに凹状を呈す。	口縁部外面ヨコナデ。 胴部内面に右下がりのハケ調整。	細・粗粒砂を含む。
〃 -59	〃 〃	〃 〃	— — — 11.0	大きな底部から、直線的に立ち上がる胴部。	内・外面共に器面調整が十分に行われず器面上に凹凸が見られ、内面には、粘土紐の単位が認められる。 ロクロは時計廻り。	〃
〃 -60	〃 〃	〃 〃		長頸壺の頸部。頸胴部内に小突帯がある。	ロクロは時計廻り。	選精された胎土。 外面全面自然釉。
〃 -61	〃 〃	〃 〃	高台径 12.6	断面方形の高台が八字状に踏張って付く。畠付けは凹状を呈す。	ヨコナデ。	細粒砂を多く含む。
〃 -62	〃 〃	土師器 壺	18.4 — — —	口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部は凹状を呈し、内側にわずかに肥厚。	内面ヨコハケ。	細・粗粒砂を多く含む。 長石・石英他。
〃 -63	〃 〃	須恵器 壺	19.0 — — —	口縁部直線的に外反。端部は面をなすが、上方に肥厚。	ヨコナデ。口縁端部をつまみ上げてヨコナデ。	細粒砂を含む。

## 遺物観察表

挿図番号	出土位置	器種	法量(cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考(胎土)
Fig14-64	第2次調査 SX 1	土師器 杯		— — — 6.6	底部から外反して立ち上がる。	糸切り。	精選された胎土。
〃 -65	〃	〃 盆		— — — 9.6	内湾気味に立ち上がる。	ヘラ切り。	〃
〃 -66	〃	須恵器 甕		— — — —		内面青海波文顯著。 外面叩きの上をナデ、その上をカキ貝風のハケ調整をヨコ方向に行う。	粗粒砂を多く含む。
〃 -67	〃	砥石			両正面研磨。		石英粗面岩。
Fig15-68	〃 SX 2	須恵器 杯身	12.0	口縁部は直線的に立ち上がる。端部はヨコナデ。		全面ヨコナデ。	
〃 -69	〃	〃 壺	10.8	口縁部は短く外反し、口唇は丸くおさめる。		口縁部内外面ヨコナデ。 内面青海波文。	細・粗粒砂を含む。
〃 -70	〃	〃 鉢	19.2	内湾気味に立ち上がり口縁部は短く外反。		全面ヨコナデ。 外面にヘラ記号あり。	〃
Fig16-71	〃 P17	〃 杯蓋	12.5	天井部水平。口縁端部を下方につまみ出す。		内・外面ヨコナデ。	〃
〃 -72	〃 包含層	〃 壺		下半にハケ状原体による右上がりの列点文。		厚手。 ロクロは反時計廻り。	〃
〃 -73	〃	〃 甕	19.2	口縁はゆるやかに外反。口唇は凹状をなし、内側にやや肥厚。		内・外面ヨコナデ。	細粒砂を含む。
〃 -74	〃	〃 杯蓋	14.2	天井部から内湾気味に口縁へ移行。口縁は下方に屈曲。		全面ヨコナデ。	〃
〃 -75	〃	〃 杯身	高台径 8.8	断面方形の高台がわずかに外方に踏張って付く、臺付けは凹状を呈す。		高台内外面ヨコナデ。	〃
〃 -76	〃	〃 鉢	18.8	直線的に外方に立ち上がり、口唇は内側に肥厚。		ヨコナデ。	細・粗粒砂を含む。

# 図版



第2次調査2区発掘前の全景（南から）



同上 石垣基礎下の状況

P L 2



第2次調査2区完掘状況（北から）



同上 SX 1 南端部分遺物出土状況



第2次調査2区SX 1遺物出土状況



同上

P L 4



第2次調査2区西壁



同上 完掘状態（北から）

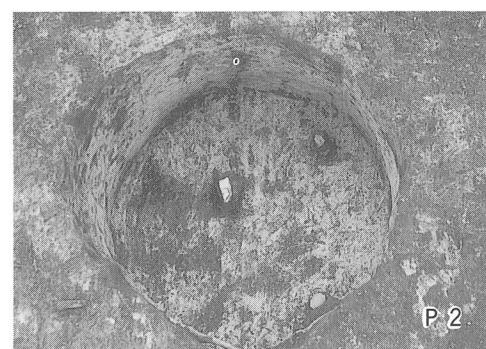
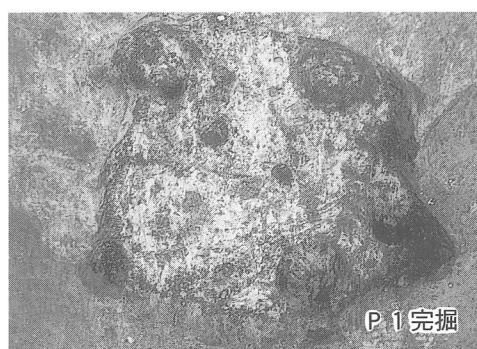
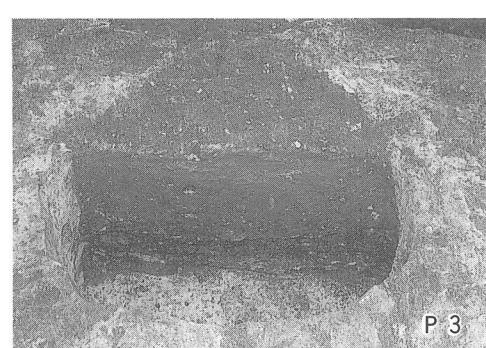
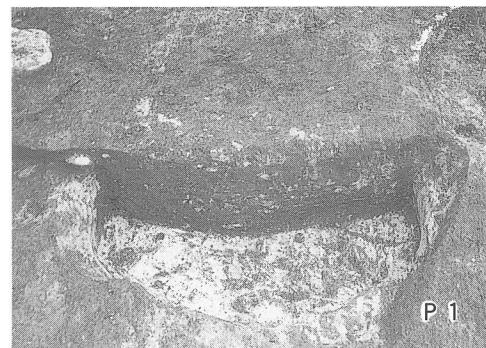


第2次調査2区P5完掘状況



第2次調査2区SX1遺物出土状況

P L 6



2 次調査 2 区遺構及び遺物出土状況



須恵器鉢 (70)



須恵器壺底



須恵器杯蓋 (14)



綠釉陶器 (17)



須恵器壺 (61)



須恵器鉢 (70)



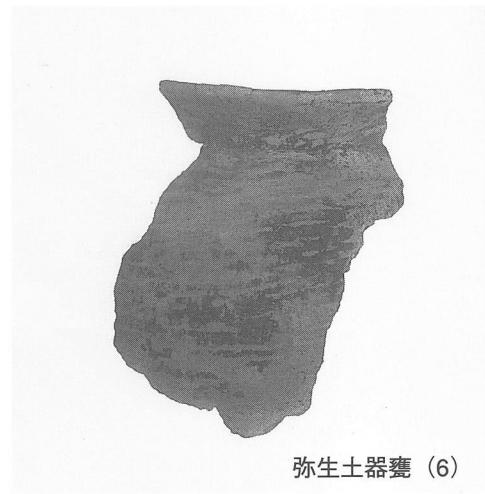
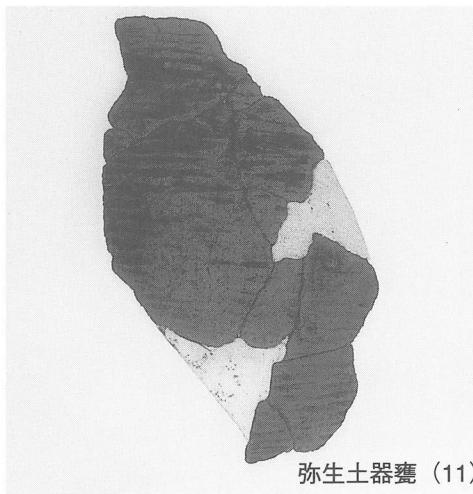
須恵器壺底部 (52)



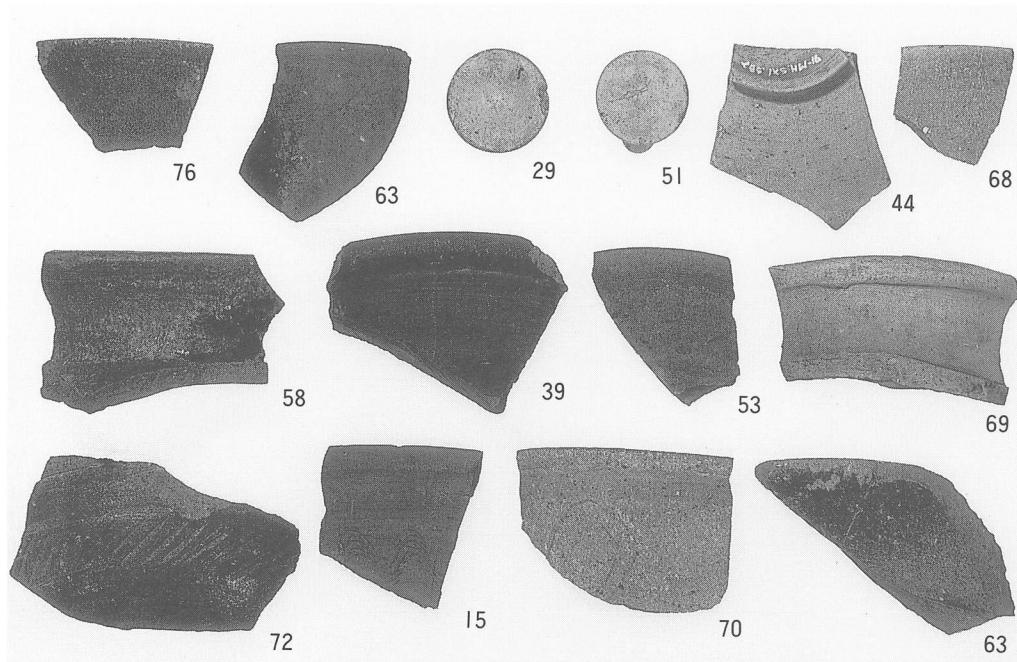
須恵器杯底部 (19)

出土遺物

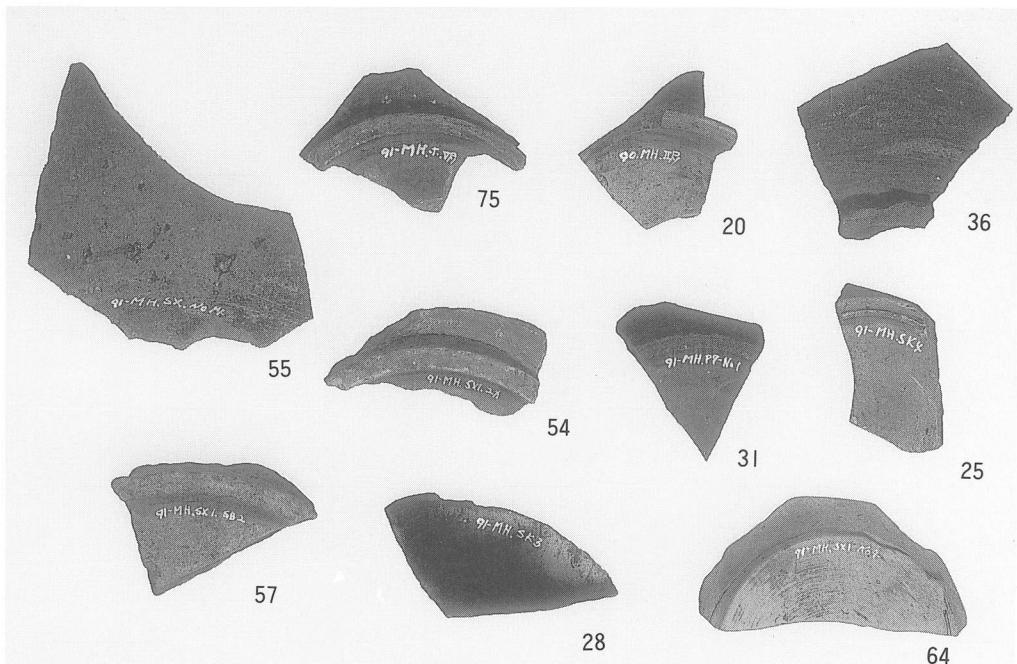
P L 8



出 土 遺 物



出 土 遺 物



出 土 遺 物

本山町埋蔵文化財調査報告第5集

## 堀ノ尻遺跡

(高知県長岡郡本山町)

1993年3月

発行 高知県本山町教育委員会

高知県長岡郡本山町本山506-3

TEL0887-76-3913

印刷 西村謄写堂